反骨の教育家　評伝 長崎太郎 I

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part I)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

はじめに—長崎太郎への旅

長崎太郎は、旧制武蔵高校教授を皮切りに、旧制高岡高等商業学校や旧制山口高等学校校長を経て、第二次世界大戦後、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）の初代学長として敏腕を振るい、幾多の陶芸家や画家を育てた教育家である。その自由と独立の精神は、時に他者と激しくぶつかるが、反骨精神が彼の魅力であった。京都美大事件、——市側の大学自治侵犯に対して闘った長崎太郎の剛直な態度は、今日再評価されてよいものがある。

彼は芥川龍之介の第一高等学校時代の友人である。入学に際しては、芥川を押さえ無試験検定トップ合格を果たす（芥川は無試験検定順位四番の合格）。一高では芥川や井川恭（恒藤恭）・藤岡蔵六・成瀬正一らと一時学寮を共にし、卒業時には赤城・榛名方面への卒業記念旅行を芥川龍之介・井川恭・藤岡蔵六らと計画・実施している。一高時代の長崎太郎は、プロテスタントの信仰をもったクリスチャンであり、芥川の『聖書』への関心や教会出席の可能性を考える際にも、落とすことの出来ない存在である。

また、長崎太郎は、菊池寛の一高退学事件の折りには、校長の新渡戸稲造と後任の瀬戸虎記に直訴し、その無罪を晴らそうと奔走した。こうした点を考慮すると、長崎太郎は芥川や菊池寛を考える場合、触れざるを得ない重要な人物なのである。芥川龍之介とその周辺の人々を研究対象とするわたしは、早くからこの人物に光を当てる必要を感じていた。すでに十年ほど前、わたしは「研究余滴　芥川龍之介周辺の人々①長崎太郎論」上・下（『都留文科大学研究紀要』第43～44集、一九九五・九～九六・三）で、この人物の素描を試みている。が、研究は日進月歩である。先頃、恒藤恭の一高時代の日記が、

『向陵記—恒藤恭　一高時代の日記—』（大阪市立大学、二〇〇三・三）として刊行される、また、長崎太郎自身の一高時代の日記が発掘されるということもあった。少し前には成瀬正一の日記（「成瀬日記」、現在高松市菊池寛記念館蔵）の発見があり、松岡譲の日記（「松岡日記」、現在遺族蔵）や森田浩一の日記（『森田浩一とその時代』に影印復刻、現物は福生市郷土資料室蔵）の所蔵も明かとなり、長崎太郎の一高時代に限定しても新資料の出現はめざましい限りだ。

ここにようやく長崎太郎の評伝を書く時期が訪れたと言ってよいのであろう。わたしは、その故郷高知県安芸市への旅からはじめることにした。安芸市への案内は、高知大学大学院に現職教員として学ぶ、奥谷俊子さんが引き受けてくれた。奥谷さんは長崎太郎と弟次郎が卒業した高知県立第三中学校の後身、高知県立安芸高等学校の教員経験もあるという。実によい方に恵まれ、わたしの長崎太郎への旅が、軌道に乗ったのである。

一　故郷と生い立ち

高知県安芸市

長崎太郎の出生地、高知県安芸町（現、安芸市）は、土佐湾に面する安芸平野の南端に所在する城下町である。東を安芸川と伊尾木川が流れ、西に妙見山が南北に連なっている。「安芸川の清きせゝらぎ」とか、「妙見山の朝風に／心も清き若人が」といったことばが、長崎太郎の母校、安芸高校の歴代校歌に詠まれるのも故なしとしない。太平洋を彼方にのぞむ町、安芸市は、今日市営球場が阪神タイガースの冬のキャンプ地として知られるように、南国の面影を漂わせた歴史のある城下町である。

安芸平野は地味豊かゆえ、古くから人が住み、開けていた地であった。土地の豪族安芸氏が代々この地を領有した。安芸氏は室町末期に長宗我部氏との合戦に敗れ、滅びるまでは、土佐七豪族の雄として存在したのである。安芸駅北西に位置する浄貞寺には、長宗我部元親に敗れ、自決した安芸国虎はじめ一族の墓がある。安芸氏滅亡後は、長宗我部氏の時代が三十年続き、徳川の時代になって山内一豊が土佐を支配するようになると、その重臣五藤為重が安芸地方を知行し、代々旧城土居に館を構え、その子孫が現在もここに住んでいるという。早くから農業が盛んだった安芸平野では、水稲二期作が行われ、現在はビニールハウスによるピーマン・トマト・きゅうりなどの栽培が盛んである。また市域の多くを占める山林は、良材の宝庫とされている。

山と共に安芸は海の町でもある。安芸の中心街から東へ約六キロ、大山岬は絶景で知られる。長崎太郎が学んだ高知県立第三中学校（現、高知県立安芸高等学校）は、潮風の吹きつける土佐湾に面した地にあった。海岸の松と大波（濤）は、安芸のシンボルでもあり、安芸高等学校創立一〇〇周年記念誌が『松濤』（高知県立安芸高等学校、二〇〇〇・一〇）と銘打つのも理解できる。この町からは、明治の実業家で三菱財閥の創始者となる岩崎弥太郎、翻訳小説や探偵小説、さらには新聞社経営で知られる黒岩涙香、作曲家の弘田龍太郎、書家の手島右卿などが出ている。

安芸は江戸時代以降、高知市と室戸岬との中間の海岸の町という地の利を生かして、農林水産物の集散地、市場町として発展した。高知から安芸までは、約四十キロほどある。現在はＪＲ土讃線が御

免まで、その先は土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線が奈半利まで通っているが、太郎の幼少時から青年時代にかけては、鉄道はなく、馬車か人力車で往復した。高知から東へ約十二キロ、手結の岬まで来ると、青い広い海が見えてくる。海に迫る山を切り開いてつけた道は、曲がりまがって東へ続く。青い海の上には大山、羽根、行当の岬が重なりあって、行く手の海に突出している。南は果てしもない太平洋である。手結山の麓から安芸までの道は、海岸線を走る。そこには和食の琴の浜という長い防風林が断続する。まさに白砂青松の海岸である。当時東京に出るには、この松原を抜けて高知に出、大阪行きの汽船に乗るのであった。

父母と家系

さて、長崎太郎は一八九二（明治二五）年六月十九日、安芸町大字西浜一六四八番地に生まれた。芥川龍之介とは同年、ただし龍之介は早生まれだから、太郎の小学校の入学は、龍之介の一年後である。太郎の生家は、安芸の中心街西浜にあり、現在は郵便局や生家の土蔵を生かした民家に生まれ変わっている。生家は真言宗の熱心な宗徒であった。

太郎の父は文之助と言い、地元の銀行に勤めていた。文之助は、曲ったことの大嫌いな、厳格ないっこく者であった。後年太郎は「幼き頃の次郎」（『福音と世界』一九五四・一一）という文章で、父について回想し、「正直で、緻密で、几帳面で、字を書くにも一画一画をおろそかにせず、ものを記すにも実に綿密であった。今残つている父の記した記録や帳簿の類を見ても、その丁寧で綿密なことは驚嘆に価する」と記している。

文之助の正直で妥協をしない性格は、しばしば回りの人と問題を起こした。一九〇四（明治三七）年の日露戦争中、公債募集の件で、勤務先の銀行の支店長と意見が対立して辞職するとか、町会議員であった時、意見を主張して通らないと見るや、職を辞任し、公民権を剥奪されると、執拗に行政訴訟を起して権利を回復するとかいったことがあったという。要するに太郎の父文之助は、生一本の反骨の性格だったのである。まさに土佐人を表現するのによく用いられる「いごっそう」そのものの人であった。文之助は正規の教育は受けていなかってけれども、自主独立の精神に富んだ人物だったのだ。長崎太郎の生涯を考えるとき、この父文之助の影響は、はかりしれないものがある。太郎が後年京都美大事件に際して市当局と対立、「教育は筋を通すものである」として一歩も引かなかった毅然とした態度は、父文之助譲りのものであったことは、論を俟たない。後年太郎は、父文之助にまつわる思い出の一つとして、次のようなエピソードを記している。

> 中学に通っていた頃のことである。私は口はばったく、父に向かって精神的自由が物質的自由よりも遥かに大切であると云い放って、人間が物質にとらわれることを軽蔑した。父はそれを聞きとがめた。父は学校教育は少しも無かったが、忽ち「物質的の独立のない処に、どうして精神的の自由独立があり得るか」と私を一喝した。この父の一言は、私の頭上に加えられた生涯忘れることのできない鉄槌であった。（「教える者の自由と独立」『土佐の教育　昭和三十八年度』高知県高等学校教育研究会刊）

母の栄は、士族の家から町人の長崎家に嫁いだ人であった。その出は長曾我部氏の家来であったが、維新後おちぶれて郷士の生活をしていた。学校教育は夫となる文之助同様ほとんど受けていなかったが、人が好く、世話好きで、忍耐強い性格であった。栄が米屋を営んだのは、夫文之助の勧めである。文之助は「金銭の価値は働いてみないとわからない」という哲学から、妻に米屋をやらせたのである。栄はどんなに忙しくても家事手伝い（女中）を使わず、店はひとりで切り盛りしていた。先の「幼き頃の次郎」から母栄に関する記事を抜き書きしておこう。

母は前にも述べたように、白米の小売商を営んでいた。毎朝五時頃には起きて掃除から朝食の仕度をし、昼間は白米をかついで持つて行くこともあり、夕方が来ると夕飯をととのえ、夕飯が終つた頃から一日の商売の会計を整理し、家計簿を父と共にととのえた。父は一銭一厘の過不足をも帳簿と現金とのつきあわせの上にゆるさなかつた。夜更けるまで幾回も幾回も、母が現金と帳簿のつきあわせに苦心していることを思い出す。この帳簿の整理が終ると、九時、十時頃から母は針仕事を始める。裁縫を正式に習つていなかつた母は、私共兄弟が学校に出るようになると、近所の仕立屋に行つて袴の縫い方を習つて来ては、それを縫う。足袋も羽織も夜更のランプの光の下で縫つた。私は十八歳の時、始めて国を出て一高に入学した時、冬近くなつて郷里から送つてくれた足袋を、母が夜半までもかかつて縫つて呉れたものだと思うと、もつたいなくて、直ちにはく気になれず、数日床の中でいだいて寝たものであつた。

文之助・栄の夫婦には、太郎に続いて一八九五（明治二八）年八月三十一日に男の子が生まれた。太郎の三歳下の弟次郎である。後年次郎は、長崎書店や新教出版社の社長として出版界で名を成すこととなる。太郎は母親似、次郎は父親似と言われた。次郎は幼い時から才気煥発、独立心に富んでいた。

小学校と中学校

一八九九（明治三二）年四月、長崎太郎は安芸町の安芸第一尋常小学校に入学した。安芸第一小学校の『百年の歩み』（安芸第一小学校創立百周年記念事業実行委員会、一九七四・九）によると、入学時の校長は時光光重、のち安芸元雅に変わっている。学校は安芸郡役所の隣で、周囲には桑畑が広がっていた。学級数十二、各学年二クラス編成であった。中学進学を目指した長崎兄弟は、尋常小学校を終えると高等小学校へと進む。今回高知県立安芸高等学校に取材に行き、長崎兄弟の卒業した高等小学校が藝陽高等小学校であることを学籍簿で確認した。右の『百年の歩み』には、門田小菊の回想「第一小学校在職中を顧みて」という文章が載っており、文中の学校史には、「大正九年四月、安芸第一尋常高等小学校と改名」とあるので、それまでは高等科を持つ藝陽小学校が安芸町の中心部にあったことになるのだろうか。

太郎・次郎の兄弟は、小学校の成績が抜群だった。西浜の二人の生家の西隣には、野町（屋号、巽屋・たつみや）という本屋があった。建物は二〇〇五（平成一七）年七月の時点で依然残っている。高等小学校から中学生時代にかけて、太郎と次郎の兄弟は、毎日のよう

に巽屋に通い、そこを図書館代わりにして新刊書を読み耽ったという。巽屋にはモダンな若い娘がいて、新刊の書籍を盛んに取り寄せては店で売っていたのである。

後年長崎太郎は「読書と私」（NHK放送原稿、一九六八・一一・一二）という文章に当時のことを振り返り、巽屋についてふれ、「新刊の図書や雑誌をドシドシ取り寄せて店に並べていました。私と私より三つ年下の弟次郎とは、この本屋を図書館代りにして読みに行つたものです。次郎は母に作つてもらつた前垂をかけて、店員の風ていで店頭に座りこんで、読んでいました」と書いている。書店巽屋は、二人にとって図書館の役割を果たしたのである。なお、弟、次郎のことは、以後の章でも太郎と関連させて、可能なかぎり述べることにしている。

一九〇五（明治三八）年四月八日、長崎太郎は高知県立第三中学校（現、高知県立安芸高等学校）に入学した。太郎は小学校の成績よく、高等科二年を終え第三中学校を受験合格したのである。父文之助は、太郎を中学校にやるなど考えていなかった。家において働かせようと考えていたのである。しかし親戚の近藤執中という人が、中学で勉強することを勧めた。彼はなかなかの人格者であり、文之助も信頼していたので、その忠告を受入れ、開校間もない第三中学校に入れてくれたのであった。後年当時を回想した文章の中で、太郎は「中学の入学試験では、算術の問題が難しかったのと、国語で『花が咲く』という『咲』の字が思い浮かばず、『吹』と似たような字を書いたことを今も思い出して冷や汗をかく」（「猿先生」一九五四年、NHK京都放送局「お休みの前に・入学の頃」原稿）と記している。

高知県立第三中学校は、高知市の県立第一中学校分校として一九〇〇（明治三三）年四月一日、旧安芸町役場と安芸郡役所階下の一部を仮校舎として開校された。高知県立第三中学校として独立したのは、三年後の一九〇三（明治三六）年四月一日のことである。日清戦争後の国威発揚の中で、国は人づくりに力を入れ、一八九九（明治三二）年二月には、「府県に一個以上の中学校（五年制普通科）を設置すべし」との中学校令を出した。それに促されての安芸町への中学校設置であった。校名が高知県立安芸中学校となるのは、一九二二（大正一一）年四月のことである。

県立三中はやがて現在の安芸高校の所在地（安芸市清和町一―五四）、海岸に面した地に校舎を建てる。眺めは抜群である。校舎が太平洋に映えるところから「浮城校」とも言われるようになる。「質実剛健」という伝統的校是や、「藝中健児（げいちゅうけんじ）」といったことばも生まれ定着する。「質実剛健」と「〇〇健児」は、どちらも一九〇〇（明治三三）年前後に誕生する日本の旧制中学校の合いことばのようなものだ。創立一〇〇周年記念誌の『松濤』（高知県立安芸高等学校、二〇〇〇・一〇）には、くわしい学校史が載っている。西沢邦輔執筆の「旧制安芸中学校略史」の「結び」には、次のような興味ある指摘が見られる。

> 場所的条件から言えば、全国の中学校の中でも最も辺境に位置するという意味で勉学的条件最悪の中学校の一つであったと言うべきであろう。しかも郡下では唯一かつ最高の学府であったので、安芸中学のなしたことと言えば、まず豊富な天与の資質を未開発の山間僻地から発掘し、厳しい状況を与えて選別琢磨し、養成された人材をそれぞれの活用場所へと送り出すこと

であった。その場所は多く地域外であったために、国家的見地から見れば人材供給の大役を果たしたことになるが、地域的に見れば皮肉なことに人材枯渇の手助けをすることにもなったわけである。

県立三中設立につきまとった宿命を、よく語った一文である。三中は「豊富な天与の資質を未開発の山間僻地から発掘し、厳しい状況を与えて選別琢磨」し、社会に送り出すことになる。三中は一九〇五（明治三八）年三月、第一回卒業生を出す。長崎太郎は一九一〇（明治四三）年三月卒業なので、六回生となる。

太郎の入学時の校長は山中鉦太郎、翌年五月からの校長は、名校長の誉れの高い大西正太郎である。大西は一九一五（大正四）年二月まで在職し、安芸中学校の基礎を築いた校長である。日記を書かせたり、書道を重んじたり、和船を購入して生徒に漕がせ、浩然の気を養わせたりしたという。在学中の長崎太郎は、漢文の教師で「猿先生」という渾名で知られた山崎邦治を慕い、その自宅に通って論語・孟子や十八史略などの指導を受けている。長崎太郎の「読書と私」（NHK放送原稿、一九六八・一一・一二）には、この「猿先生」のことが出てくる。以下のようだ。

> 或る日、学校の授業中に、この先生が「勉強とは何か」と質問しました。「本を読むことです」其の他いろいろの答が出ましたが、先生の気に入らない。「今日知らぬ事を明日知る事です」と私が答えると、「ウーン、そうだ」とうなづき上機嫌でした。

当時の県立三中の教師には、県外者が多くいた。人事が全国的規模で行われたからである。その中でも数学・物理の教師笹原卯一郎、柔道の長崎勝などが知られている。文化勲章受賞者で国語学の山田孝雄も草創期の三中に勤務したが、それは太郎入学前のことである。太郎の五年間の学力・操行は申し分なく、学籍簿によると、常に「操行学力優等一等賞」である。そればかりか、毎年皆勤賞まで得ている。同級生には、後年安芸高等学校同窓会長となるクリスチャンの須賀寛郎がいた。

キリスト教との出会い

安芸には、早くからプロテスタントのキリスト教が布教されていた。日本基督教会安芸教会（現、日本キリスト教団安芸教会）は、『日本キリスト教歴史大辞典』（教文館、一九八八・二）によると、「一八八五（明治一八）年の高知教会誕生後、同教会の長老たちが宣教師フルベキやグリナンと共に、翌年、高知市東方の安芸村（現、安芸市）に伝道したのに始る」と簡潔に記されている。『高知教会九十年記念誌』（日本基督教団高知教会、一九七六・三）には、一八八五年の伝道地として「後免、安芸、安田村、高岡、佐川町、秋山村、土佐山村」の名が記されている。また、『安芸教会史』（日本基督教団安芸教会、一九七九・三）には、安芸への伝道は、「土佐勤皇党ゆかりの者たちが縁になっているのではないか」との記述がある。つまり明治政府に失望した武士が中心となっていたというのである。『安芸教会史』は、以下のように書いている。

安芸への伝道経路について一つの憶測が可能である。それは、土佐勤皇党ゆかりの者たちが縁になっているのではないかということである。

まず、高知からたびたび伝道に来た坂本直寛は坂本龍馬の姉の子で安芸郡安田村高松家より龍馬の兄権兵の養子となった者、また武市安哉は二十六歳で安芸郡書記となったがもと大埆村（南国市）の郷士であるので瑞山との何らかの関係を想像しないではいられない。

一方安芸の受入れ側で言えば、菅和（すがかのう）は二十三士の一人須賀恒次の弟、須賀信吉は恒次の養子、寺尾準興は二十三士の寺尾権兵の弟、清岡玄之助は清岡道之助の一門である。

一八八九（明治二二）年には、安芸講義所が設立され、その年手塚新牧師によって、安芸講義所最初の洗礼式が行われたことが『高知教会九十年記念誌』に見える。一八九二（明治二五）年には、正式に教会として認可され、翌年には会堂建設のための総会がもたれ、一八九四（明治二七）年に完成している（献堂式、一八九五・一・三）。が、手塚新牧師が一八九三（明治二六）年十二月に後免教会に転出した後、安芸教会は約半年無牧となり、翌年五月末大石憲英牧師を迎えるが、一年半で教会を去る。次いで千磐茂雄牧師が第三代牧師として就任、約四年牧会する。その後一年以上の無牧時代を経、津久井新三郎牧師が一九〇二（明治三五）年六月に赴任、一九〇七（明治四〇）年十二月に辞任、教勢は伸びていたものの、五度目の無牧時代を迎える。この無牧時代の安芸教会に、森勝四郎という後にイエス・キリストの教会を創始する伝道師が、何度か説教をすることになる。

『安芸教会史』には、「当時高岡にいた森勝四郎師は明治三十八年に数回安芸教会で説教し、四十年には五回来芸して朝夕あわせて十回説教し、四十一年に百島牧師赴任の直前には連続三度説教している」とある。長崎太郎の『宣教者森勝四郎先生とその書簡』（私家版、一九六一・九）は、のちイエス・キリストの教会（森派）を創設した森勝四郎と安芸教会のことを語る貴重な文献である。その本に「日本基督安芸教会の歴史」という一項がある。以下に引用する。

安芸教会の歴史は可なり古く、日本基督安芸講義所が明治二十二年頃設立せられ、明治二十五年十月には、高知教会と協議の上、同教会より分離して、安芸教会となる件を浪華中会に願い出で、その承認を得た。そして二十八年には会堂が落成して献堂式が挙げられた。講義所が設立せられると手塚新牧師が来任し、その転出のあとに大石憲英牧師、大石牧師の去つた後は、高知の多田素牧師が毎月一回来援して居たが、三十六年に千磐武雄牧師来芸、その後任が津久井牧師であつた。

津久井牧師とは津久井新三郎である。津久井は大石憲英牧師同様、日本基督教会系の足利教会（栃木県）の出身で、明治学院の神学科を卒業、長野教会、上諏訪教会などを歴任ののち、安芸教会に赴任したのであった。たまたま長崎家では持ち家が空いていたので、津久井牧師に貸すことになる。実直でおだやかな性格の津久井は、長崎家の二人の子どもを日曜学校に誘った。太郎県立三中の一年生、次郎安芸第一尋常小学校四年生の時であった。二人の少年、長崎兄

弟のキリスト教との出会いである。

長崎兄弟を教会に誘った津久井新三郎牧師は、二年ほど安芸教会を牧会した後、一九〇六（明治三九）年に辞任し、大阪へ去る。安芸教会は牧師の腰が定まらず、短い期間にしばしば牧師が代わっていた。

再び長崎太郎の『宣教者森勝四郎先生とその書簡』に戻ると、森勝四郎が安芸町に来たのは、津久井牧師が辞任した直後のことであるとし、「先生は安芸教会の有力な信者の推薦によつて同教会で数回説教した。無牧となつて居た安芸教会の一部の信者はやがて、先生を牧師として招聘したいとの熱心な希望を持つに至つた。然し他方には、日本基督教会の牧師でない先生を迎えて、安芸教会が、日本基督教会から離脱する事はよろしくないと主張する者があり、之が為めに、教会員の議論は二つに分れた」とある。

伝道者森勝四郎は、菅和ら有力信者の推薦を受け、前述のように安芸教会で何度か説教をした。無牧の安芸教会の一部の信徒は森の説教に魅せられ、牧師として招聘したいという気持ちを持つまでになった。しかし、すでに安芸教会の所属する日本基督教会浪華中会では、植村正久の弟子百島操（ももじまみさお）の就任を決定しており、森は安芸基督教講義所（のちイエス・キリストの教会と改称）を開設し、安芸教会は二つに分裂する。

長崎太郎・次郎の兄弟が安芸教会に通い始めたのは、津久井牧師時代からであり、やがて百島牧師を迎え、森派との分裂の起こるこの教会の激動期であったことになる。中学生の長崎太郎は、積極的に教会に通い、聖書を読むようになる。安芸教会は創設のころ、郡長菅和や村長須賀信吉、それに医師宇田猛児や製糸工場社長並村喜七ら有力者が受洗しており、教会に通うのに抵抗は少なかったようだ。太郎は「はじめ聖書の中の倫理観に興味をもってこれを読み始めたが、やがて信仰の芽が吹き始めた」（「行じて居るもの」『現代と仏教』8号、一九五六・一一）と後年回想している。

さて、新任の百島操は早稲田大学の学生時代、窪田空穂・吉江孤雁・水野葉舟らと、市ケ谷教会牧師植村正久の聖書研究会に出席、その影響で牧師を志し、東京神学社（現、東京神学大学）に学んだ。彼は理想主義者のトルストイアンであった。また文筆の才にすぐれ、植村の起こした『福音新報』に百島冷泉のペンネームで児童向けの読み物に清新な筆をふるった。その文学的才能には、並々ならぬものがあった。

沖野岩三郎は百島冷泉の「蕎麦」（『福音新報』第三九七号、一九〇三・二・五）という児童読み物に対し、後にいうところの童話として恥ずかしくないものがあるとし、百島を「日本の基督教児童文学者の最初の人として推すべき」と高く評価する（「キリスト教児童文学史　明治時代」『キリスト教児童文学』一九五七～五九連載。のち『明治キリスト教文学史』として、久山社より刊行。一九九五・六）。百島操は東京神学社の卒業を待たずに安芸教会に赴任し（一九〇八・一一・一着任）、先任の津久井牧師同様長崎家の持ち家に住んだ。それによって長崎兄弟は、百島の指導を受けることになる。面倒見のよい百島は、長崎兄弟の指導には特別に熱心であった。

長崎太郎の『宣教者森勝四郎先生とその書簡』によると、百島操は新進気鋭の青年牧師であり、安芸教会の発展のためによく奮闘したが、牧会経験に乏しかったこともあり、信者の心を十分にとらえることができなかったという。右の本には、「たまたま、同氏の説

教中、ベテスダの池の奇蹟の解明につまづいた安芸教会の信者が、森派に走つたのを始めとして、日本基督安芸教会の形勢は次第に非となり、森派に走る者の数は愈々増加し」とある。ベテスダの池の奇蹟とは、新約聖書の「ヨハネによる福音書」第五章一～九に書かれたイエスの行った奇跡である。新共同訳『聖書』では、ベトザタの池と記される。エルサレムには、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、水の動く時、水の中に真っ先に入ると病は癒されるとされた。そこにたまたま横たわっていた三十八年も病気で苦しんでいる人が、イエスに願って癒されたという記事である。

百島牧師の「ベテスダの池の奇蹟の解明」とは、『安芸教会史』によると、「百嶋牧師がこの奇蹟を間歇温泉によるよるものであると説明」したために生じた混乱だとし、それは当時の教会の『日誌』からして、「四十一年十一月十五日の夕拝の折り」の説教で、「着任後わずか二週間、三度目の聖日の出来事」と記している。

百島は安芸教会での牧会に限界を感じ、一九一〇（明治四三）年四月二十四日、安芸教会を辞し、日本基督教会所属の大阪東教会に去る。着任以来わずか一年半である。『大阪東教会百年史』（日本基督教団大阪東教会、一九八二・三）によると、百島の大阪東教会への赴任は、一九一〇（明治四三）年五月である。長崎太郎が上京し、第一高等学校に入学する年のことだ。安芸教会での百島牧師の評判は、芳しくなかったというものの、長崎太郎は百島を信頼し、その後も何かと相談をもちかけることになる。弟次郎も百島から大きな影響を受けている。次郎に北海道大学農学部入学を勧めたのは、百島操牧師であった。のちにキリスト教出版界に大きな功績を残した長崎次郎の志操に、大きな影響を与えた人としての百島操の存在を忘れてはなるまい。

トルストイに傾倒し、キリスト教的人道主義を理想とした百島は、大阪東教会に赴任後、次第に長老派の日本基督教会の信仰告白の立場から離れるようになる。『大阪東教会百年史』の伝える百島操の姿は、異常である。聖日礼拝の講壇では、ロシア服のルパシカを着たり、教派の用いる祝祷を自分の考えに適うように改案したり、尋常の牧師とは異なったところが目立った。また、社会主義的言辞をあえて弄して、警察当局が危険視する思想家と交わりをもち、官権の尾行がつくなどしたという。そうしたこともあったためか、大阪東教会の教会員数は、次第に少なくなり、百島は牧師を辞任する。一九二五（大正一四）年四月のことである。その後は書籍販売の仕事にあたったという。

が、牧師をやめ、書籍販売と文筆生活に入った百島操のその後の消息は、杳（よう）として知れない。没年月日さえ定かでないのである。大阪東教会との縁もすっかり切れ、孤独な晩年を送ったらしい。『大阪東教会百年史』は、一九一〇（明治四五）年から一九二五（大正一四）年まで十五年もの間、牧師であった百島操の牧師としての姿勢を批判し、「歴代牧師略歴」の項でも、「辞任後は牧会から離れ、書店を経営して自らの著作の出版や、諸書籍の販売などをされたという。（生没年など詳しいことは資料が入手できず不明）」と素っ気ない。百島の方は十五年も牧師として勤めたこともあってか、大阪東教会が教会建設八十周年を迎えた時には、杖をついて記念礼拝に出席したとは、横浜海岸教会牧師久保義宣が、たまたまわたしに語ってくれたことだ。久保義宣牧師は、大阪東教会を牧会した久保喜美豊牧師の子息である。

沖野岩三郎は先の『明治キリスト教児童文学史』で、何度も百島の『福音新報』に載った作品を取り上げ、その清新な筆致の作品に愛着を示し、「あれだけの才筆と芸術味とを持った百島冷泉が、其の活舞台を得なかつたことは、いかにも惜しかつた」と記している。長崎太郎・次郎兄弟に大きな影響を与えた牧師百島操の後半生を、わたしは調べたいと思い立ってからかなり経つ。が、依然手がかりはない。

二　一高の青春

無試験検定トップ合格

一九一〇（明治四三）年春、高知県立第三中学校を卒業した長崎太郎は上京し、第一高等学校（略称、一高）の入学試験に備えた。長男の太郎を、父は高校まで進ませたくなかったが、成績が抜群であり、教師も進学を強く勧めたので、受験の許可を与えることとなる。太郎は将来中学の英語教師になるという夢を持っていた。

そのころ地方の中学出身者で一高を目指す者は、予備校に通うことが多かった。三月に中学卒業、七月高校入試、九月入学式というスケジュールに応じるためには、春に上京しなくてはならない。成績優等の彼は、東京の一高受験に何ら不安はなかったものの、東京の生活に慣れようと、中学校を卒業するとすぐに上京した。

明治の中頃から天下の一高には、全国から多くの秀才が集まり、入学試験は激烈な競争となり、その弊害も指摘されはじめていた。そして、この年から中等学校で優秀な成績を修めた生徒は、書類審査によって無試験検定による入学許可制度が実施されることになった。当時の学制は、中学校の卒業が三月、高等学校の入学試験が七月中旬、入学式が九月十日頃となっていた。彼は英文解釈・幾何・三角法など主要科目を中心に受験勉強をしていたものの、できれば無試験検定で一高に入りたかった。

長崎太郎は英文科志望の第一部乙類の無試験検定に応募することになった。安芸中学校での成績は、完璧に近かった。それは前述のように、現存する学籍簿が語っている。当時の県立三中の学籍簿は、成績の細かな数値などは示していない。が、総評が語るのである。後年彼は、弟次郎と自身を較べて、「弟は子供の時から才気があり、父も弟にはやや寛大であるようであったが、私はその時分むしろ気が小さくて、厳格に父の教えに服従しようとした」（「幼き頃の次郎」『福音と世界』一九五四・一一）と回想するが、中学時代の太郎は、父の厳格な教育のもと、ひたすら学校の勉強に励んだ。それが「操行学力優等一等賞」という高得点となり、校長推薦の無試験検定の応募につながったのである。

この年六月二十四日、無試験検定合格候補者の名前が発表された。何とトップ合格であった。健康診断を終えた後の晴れの合格者の名前は、政府の広報『官報』に載った。『官報』第八一三七号（明治四三年八月五日）の「学事」欄に、「入学許可　第一高等学校ニ於テ来ル九月十一日ヨリ大学予科ニ入学ヲ許可スヘキ者ノ族籍、氏名左ノ如シ×印ハ無試験検定ニ合格シタル者ナリ（文部省）」として、一高合格者名が掲げられている。第一部乙類八名の無試験検定合格者は、長崎太郎を筆頭に鎌田寅治・石原登・芥川龍之介・佐野文夫・小栗栖国道・根本剛・久米正雄である。成績順の発表であった。ちなみに同じ第一部乙類の試験合格者の中には、菊池寛・石田幹之助・井

川恭（のち恒藤恭）・松岡善譲（のち松岡譲）・藤岡蔵六らがいた。

この年の第一高等学校第一部乙類の入学試験は、受験生の予想を上回るきびしい競争となった。志望者こそ第一部甲類（法科）や第二部乙類（農科）に比べると少なく、五十名ほどだったものの、前年入学の十名が岩元禎（漱石『三四郎』の広田先生のモデルとされている）担当のドイツ語の試験に失敗、留年していたので、入学ワクが少なかったからである。それだけに無試験検定、しかもトップ合格はうれしかった。

前年入学ながらドイツ語を落とし、太郎と同級になり、その交わりが晩年にも及んだ土屋文明は、長崎太郎が一九六九（昭和四四）年十二月七日に没した時、「留級の吾等に来りし優等生に思ひきや生を終ふる交り」（『続々青南集』白玉書房、一九七三・七収録）と詠んでいる。『官報』に報じられた首席合格は、当時としては名誉であったのであろう。当時『官報』は喫茶店などにも置いてあったらしく、一つの情報源ともなっていた。太郎の無試験検定トップ合格のニュースは、たちまち故郷の安芸町にも伝わった。それは両親を満足させるものでもあった。以後、両親は家計をやりくりし、太郎に送金することとなる。

『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』には、無試験検定トップ合格の長崎太郎が話題性を持って登場する。「白皙カイゼルひげの岡田先生、首席の長崎君に一頁よませて解釈をさせる」（一九一〇・九・一四）、「級の原籍表をつけた所を見るに、大ていは明治廿三年あたりが多い。明治廿六年といふのがある。留学生の何培君は十八年で、北京優級師範学堂卒業。無試験入学者ハ八人あつて、長崎君（高知）が一番」（一九一〇・九・一九）などとある。

学友たち

一九一〇（明治四三）年第一高等学校入学者には、後年名を残した人が多い。すなわち先に名をあげた人々のほかにも、第一部乙類には留年組に山本有三や谷森饒男がいたし、補欠入学組に成瀬正一、また隣の第一部丙類には倉田百三・秦豊吉・藤森成吉らが、第一部甲類には矢内原忠雄・三谷隆信らがいた。なお一級上の文科には山宮允・豊島与志雄・岡田（林原）耕三らがおり、これらの人々との相互感化は、はかりしれないものがあった。

一高は全寮制をとっていた。一年生の時は類を問わず、さまざまな専攻生と起床をともにすることになっていた。しかし、自然に同じクラスの者の集まりが生まれる。長崎太郎は、当初佐野文夫や菊池寛の仲間になった。佐野文夫のことは、次章でくわしく記さなければならないが、厳格なキリスト者の家に育ち、語学と数学にすぐれた頭脳を持っていた。彼は頭がいいばかりでなく、容貌もすぐれていたので、クラスの中でも目立った存在であった。芥川龍之介すら入学当初佐野にひかれ、親しくしていたとは菊池寛の証言である（「半自叙伝」『文藝春秋』一九二八・五～二九・一二）。

一九一〇（明治四三）年の暮れ、年末でふところのさびしい時、長崎太郎のもとに郷里の父から為替が届く。彼は仲間の菊池や佐野を誘って湯島の牛肉店「江智勝（えちかつ）」（現在）へ行き、食べて、飲んで騒いだ。菊池が奇声をあげて寮歌を歌い、皆は地方弁まるだしで議論をたたかわせた。楽しい会であった。が、二、三日後、太郎は高い熱に襲われ、腸チフスの疑いありということで根岸の避病院に入れられてしまう。菊池寛と佐野文夫は毎日のように見舞ってくれた。菊池寛は看護婦の目を盗み、魚河岸のにぎり寿司をベッドの中にそ

っと入れてくれた。退院後は大晦日から元旦にかけて近郊を旅行している。これらのことを、長崎は後年「吾友菊池寛」（山口アララギ会『なぎ』一九五六・二）に書き残した。一部を引用しよう。

私が退院すると、大晦日からみんなで近郊に旅行することになった。本郷三丁目で杖を立て、それが倒れた方向に向かった。どこをどう歩いてか、江戸川口の猫実村にたどり着いたが、それは寒い晩であった。村にたゞ二軒の木賃宿は、菊池君の風貌と汚らしい身なりに辟易してか、満員を口実に泊めてくれない。駐在巡査の世話になって、愈々その一軒に泊まってみると、これは又薄汚いひと間に通され、暗い電燈の下にのべられた布団は垢に汚れていた。みんなは、マントを掛布団の下に入れて、顔を覆って寝た。一夜あけて、元旦を迎え、静かな河岸を歩いて宿に帰ると、朝の食膳には新鮮な魚や貝類が豊富に並べられて、私共を喜ばせた。この旅以来、私共の友情は親密の度を加えた。

一高一年生の青春の思い出がよく描かれている。入学半年後の一九一一（明治四四）年二月一日、一高第一大教場で弁論部主催の講演会が開かれ、徳冨蘆花が幸徳秋水らの大逆事件判決への抗議を込めた「謀叛論」と題した演説を行った。多くのフレッシュマンがこの演説を聴き、大きな影響を受ける。長崎太郎の友人で蘆花の演説を聴いたと書き残したのは、井川恭・菊池寛・久米正雄・松岡譲・成瀬正一・矢内原忠雄らである。長崎太郎がこの演説を聴いたかは不明である。

二年に進級すると同じクラス（英文科）の者だけが一室になり、長崎は菊池・佐野・久米正雄・松岡善譲（のち譲一字に改名）らと南寮の一室にかたまり、中寮には井川恭・芥川龍之介・石田幹之助・小栗栖国道らが集まった。寮は以後ときどき編成変えがあり、二年生の後半には、中寮三番で井川や芥川や石田幹之助・藤岡蔵六・成瀬正一らといっしょになる。同じ寮に寝泊まりするようになってから芥川とは急に親しくなる。「長崎日記」の一九一二（明治四五）年八月九日の記録には、「芥川君からオットーの文法と晶子の青海波とを送ってくれた日」とある。続いて同年九月十三日には、「芥川君と乳屋でビスケットを食つた。外で静な時を費した」とあり、同月二十五日には、「芥川君と散歩した。同君としては最もおつぴらに色々の話をせられた。兎に角に自分は同君の話を聞いて芥川君に対してより多くのよい考へを持つ様になる事だらう。うれしい散歩であつた」と書いている。後年、長崎が短歌の道で師と仰ぐことになる土屋文明との交わりは、一高時代にはさしてなかった。

深まる信仰

一高入学後、長崎太郎は百島操牧師の勧めもあって、百島の出身教会である日本基督教会市ケ谷教会に出席するようになる。市ケ谷教会は一八九〇（明治二三）年、日本基督教会の講義所として発足し、稲垣信・押川方義・植村正久らの指導を受けて一九〇一（明治三四）年三月教会に昇格、太郎の上京した一九一〇（明治四三）年には、神学校を出たばかりの秋月致が牧会をしていた。太郎は満十八歳のこの年、市ケ谷教会で若い秋月牧師から洗礼を受けるのである。父文之助の許可を得ず、ひそかに実行したのであった。のちにその

ことが郷里の父親に知られ、危うく勘当を受けるところだったという（「行じて居るもの」）。

一高には基督教青年会があり、太郎は同じ学年の第一部甲類入学の矢内原忠雄や三谷隆信（三谷隆正の弟）らと暗い教室で集会を開いていた。矢内原忠雄は内村鑑三の聖書研究会に出席し、無教会主義に立つ伝道を考えていた。三谷隆信は、兄隆正の影響もあって、熱心に聖書を読んでいた。矢内原忠雄の「日記」（『矢内原忠雄全集』第二八巻収録）によると、一九一一（明治四四）年のころ、長崎は矢内原と三並良の家やテモテ教会での読書会や祈祷会に熱心に出席している。一高時代の長崎太郎は、とにかく熱心なクリスチャンであった。彼は純粋な信仰を持ち、同室の者にも己の信仰を、隠すことなく語った。

一九一〇（明治四三）年の一高入学生、否、同時代の青年の多くは、聖書やキリスト教に強い関心を抱いていた。親友となる井川恭はむろんのこと、芥川龍之介・藤岡蔵六・松岡譲・成瀬正一・佐野文夫など、彼らは一時期熱心に聖書を読み、中には教会の説教を聴きに行く者もいたのである。井川恭は島根県立第一中学校時代イギリスの宣教師オリバー・ナイトから聖書を学び、一高時代にも聖書は手放していない。彼は芥川龍之介に在学中英文の『新約聖書』（*THE NEW TESTAMENT* オックスフォード大学出版部刊）を贈っている。これはいま東京駒場の日本近代文学館の芥川龍之介文庫に保存されている。藤岡蔵六は海老名弾正の本郷教会（弓町本郷教会）に出席していたし、佐野文夫はクリスチャンの父を持ち、小さい頃から日曜学校に出席し、聖書に親しんでいたので、一高時代は聖書のことばを引用しての文章「神の発見の過程」を、『第一高等学校校友会雑誌』（第二二七号、一九一三・六・一五）に発表している。

こうした仲間に長崎は自身の考えを述べ、教会出席を説いたのである。宮坂覺によれば芥川龍之介は長崎に勧められて、当時教会に出席した（「芥川龍之介の作家前史試論—青年期におけるキリスト教—」『上智国文』第10号、一九七〇・二・二八）というが、出席した教会は長年特定できなかった。けれども、近年一高時代の長崎太郎の「日記」、それに井川（恒藤）恭の『向陵記—恒藤恭　一高時代の日記—』の出現によって、芥川の出席した教会もわかりはじめた。複数の教会である。

芥川龍之介が一高時代に出席した教会には、まず、東郷坂教会があげられる。長崎太郎と井川恭が入寮した日独学館の牧師シュレーデルの教会である。ここはドイツ人教会であった。『向陵記—恒藤恭　一高時代の日記—』には、東郷坂教会の記事がよく出てくる。一九一三（大正二）年六月十五日の日曜日には、芥川・長崎・井川、それに藤岡蔵六の四人で、この教会に出席したとの記述がある。そのほか、長崎太郎が矢内原忠雄らと通った一高裏のテモテ教会、長崎の受洗した市ヶ谷教会、井川の『向陵記』に散見する「森川町の教会」、さらには藤岡蔵六が出席した海老名弾正の牧会になる本郷教会（本郷弓町教会）も考えられるのである。

長崎太郎は主として受洗した市ヶ谷教会に通った。学内では矢内原忠雄らと一高基督教青年会を主宰している。「長崎日記」には、一高時代に井川恭といつも信仰問答をし、聖書を共に読み、祈っている記事が見られる。『向陵記—恒藤恭　一高時代の日記—』の一九一二（明治四五）年六月五日の記録に、「△五十嵐君が「長崎、ヤソ教なんかイリュージョンだ、よしつちまへ」といつた。／あゝ、イリ

ユージョン、イリュージョン、最後のイリュージョンに、たとへバおぼれる人がわらにとつつかまるやうに、つかまりたい」とある。

当時の長崎太郎の信仰は、ストイックなものであった。彼が当時大阪東教会にいた百島操に出した便りの下書きめいたものがある（長崎陽吉氏保存）。弟、次郎が安芸中学校を卒業し、百島牧師の勧めでクラークの精神的伝統の残る札幌農学校の後身、北海道大学農学部を受験しようと上京し、太郎と共同生活をはじめた頃のもので、近況報告がてらの便りである。中に以下のような文面が見出せる。

……予備校の授業が　八時より始まり四時すぎまである事なれば毎日中々いそがはしく、それでも入学試験といふ厄介なものを控へてゐる事なれば、本人も本気になりて奮励致しおり候。しかし　相変はらず英語は頗る下手にて、今年直ちに入学し得る事は至難の事と存じおり候。次郎は、なほ次第に信仰上の事に於いては進み居るもの丶如く見受け、少なからず喜びおり候。上京に際して　この問題に関し　父と衝突し、父より私の方に上京を差し止むる等との通知もありし為　大分心配しおりしも、上京後　本人の決心等を聞きみるに　甚だ面白き節これあり　安心致し候。目下日曜日には学校の近くの教会に連れて参り候。私の信仰の事に就いては　何時か申し上げし如く、独りにて思ひ巡らしおり候。この頃に至りても　余り異なりたる考へにもならざるも、只基督に対する尊敬愛着の念の次第に燃ゆる事を覚へ申し候。この頃は、たゞひたすらに基督を知り　これに没入せん事を努め申しおり候。たゞ自己の内にのみ生命の泉を掘り求めんとする努力のみにては、とても真正の命には至り難く、聖書など熱心に読み行くうちに　真に生命の泉は基督ご自身の中に最も多く　深く湧き溢れ居る事を　痛切に感じ申しおり候。これまで　基督に神性ありや否や等と　充分喧しく論議したる事もあれど、今や　この種の事は問題とならず、たゞ福音書を通してあらはれたる基督　猶進んで基督そのものに直入するよう努めたきものにて候。祈りの事に関しては、幾多の疑問これあり、闇の中をあちらこちらと探り歩きおり候。すべてのこの種の事に就いては、先生のご意見など承りたき事も多くこれあり、夏休の来たるを待ちおり候。

右の書簡には、自身の信仰に関して、「基督に対する尊敬愛着の念の次第に燃ゆる事を覚え申し候」とか、「たゞひたすらに基督を知り　これに没入せん事を努め申しおり候」とかあって、熱心に信仰の道を歩む若き長崎太郎を彷彿させるものがある。藤岡蔵六の回想記『父と子』（私家本、一九八一・九）には、一高時代のそうした長崎の様子がつぎのように描かれている。

級友長崎が或時「基督の模倣」（Imitation of Christ）と言うことを主張した。それは或る西洋人の著書から得た考ではあるが、吾々は完全なる人間―神の子―基督に対しては最早批評する余地はない、唯だ模倣すれば宜いのだと説いた。私はそれに反対した。どんなに偉大な人間にだって批評の余地はある、批評もせずに模倣するだけなら自己の個性や独自性は無くなる、極言すればそれは最早自己ではなくて他人である、模倣は創造に及ばない、吾々は自己を創造しつつ成長発展しなければならぬ、

と私は主張した。

『父と子』の著者藤岡蔵六は、一八九一（明治二四）年二月十四日、愛媛県北宇和郡岩淵村（現、津島町）に生まれた。一高には、愛媛県立宇和島中学校を経ての入学であった。成瀬正一の一高時代の「日記」の一九一二（明治四五）年五月二七日に、中寮の人々の寸評が記されており、藤岡は「伊予の人だ。矢張り真面目な人だ。中々の勉強家だ。静座法に熱心な人だ。哲学をやる由だ」と評されている。

中学時代体を悪くして、卒業後一年休養を必要とした彼は、一高に入るや岡田虎次郎の創始した岡田式静座法をはじめ、健康を取り戻していた。読書を好み、観劇に目がなかった藤岡は、同時に理想主義者で常になにかを求めねばならぬ思索癖のある青年であった。海老名弾正が牧師をしていた本郷教会（弓町本郷教会）へ頻りに出席し、その「熱烈な信仰と高潔な人格とから自然に迸り出る魂の雄弁」（『父と子』）にひきつけられた。藤岡は長崎太郎について『父と子』で、「入学当初首席を占めて居た高知県出身の長崎太郎と言う青年とも近付きになった。私は豫てから土佐人に好感を有ち、一度親しく交際して見度いと思って居たので、今その機会を得たことを喜んだ」とある。

藤岡蔵六は芥川龍之介とも親しかった。入学早々藤岡は、龍之介と話を交わすようになった。『父と子』には、一高入学当初のことが語られた後、龍之介にふれ、「また生粋の江戸児で、芥川龍之介と言うスマートな青年が居たが、彼はどう言う訳か私に近付いて来て、『一度僕の宅へ遊びに来給え』と言うので行って見た。当時彼の家は新宿にあって搾乳業を営んでいた。二階へ通されて搾り立ての牛乳を御馳走になった。其時二人は何を話したか忘れてしまったが、田舎弁の私が東京弁に魅了され乍ら話したこと丈けを覚えてる」と記している（藤岡蔵六に関しては、小著『悲運の哲学者　評伝藤岡蔵六』イー・ディー・アイ、二〇〇四・七参照）。

『父と子』には、長崎太郎を評して「彼は熱心な基督教信者であった。既に堅い信仰を有つ者に取つて、基督は完全無欠な人間即ち神であつて、最早批評の余地はない。唯模倣すれば宜いと言う態度になるのは当然である」とのことばも見られる。長崎太郎の信仰を藤岡蔵六は、「純真ではあるが単純」と批判した。確かにそういった面は否定できないものがあった。それを面と向かってはっきりと言ったのは、井川恭であった。

井川恭との交わり

芥川龍之介が一高時代井川恭と親しかったことは、よく知られたことであるが、長崎太郎もまた井川と親しかった。しかも、その交わりは、生涯のものとなる。

学年が進み、北寮四番で寝起きをともにするようになって、長崎はこの四つほど年上の級友に、強くひかれるものを感じ出した。井川は一八八八（明治二一）年十二月三日、島根県松江市内中原（うちなかはら）町の生まれ。島根一中卒業後、病気で三年間静養した後、一九一〇（明治四三）年に一高の試験を受けて、第一部乙類（英文科）に入学、芥川や長崎と一緒になったのである。苦労し、年齢を重ねてから一高に入っただけに、人間としてのスケールは大きかった。

成瀬正一の一高時代の日記の一九一二年五月二十七日の記事に

は、前述のように一高中寮の人々の寸評が見られるが、井川は「級の首席で温厚な人。親切である。井川君の様な人は時々菊池の様な奴に欺かれる。級の総代として最もよい人」とある。井川は後年恒藤姓となり、気骨ある法哲学者となる。同志社大学や京都大学で教鞭をとり、一九三三（昭和八）年の京大事件を闘い抜き、戦後は大阪市立大学の学長になった（恒藤恭に関するくわしいことは、小著『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五参照）。

井川恭と長崎太郎とは、一高卒業後京都大学法学部に進学したこと、共に京都大学に勤務したこと、さらには戦後の困難な時期に、二人とも学長として公立大学の創設に携わったことなど、共通項が多い。長崎は後年「行じて居るもの（『現代と仏教』8号、一九五六・一一）で一高時代を回想し、「当時私は英文科の生徒で、一高の自治寮で恒藤恭君（現大阪市立大学学長）と相識るようになり、信仰に就いて熱心に語り合った。私はあらゆる点で、恒藤君の指導を受けたが、信仰の話になると常に受け身で、同君の鋭い批判に堪える事が出来なかった。卒業の前には、二人で弥生ケ岡の下宿の一室に同居して基督教に就いて論じ合った。聖書も一緒に読んだ」と記している。二人の親しい交わりを語るものだ。

一九一二（明治四五）年六月、長崎太郎は期末試験を終えて、井川恭と共に帰省の旅に発ち、京都で別れる。六月三十日、長崎は故郷安芸町から松江の井川恭に便りを出す。井川恭はそれを『向陵記』に書き写している。若き日の二人の友情を語る手紙なので、全文を引用する。

今朝ハ帰省以来はじめての雨です。寮に居る時ハ唯うるさいとばかり感じた雨も懐かしい故郷でハ何だかしみじみとした嬉しい心地がいたします。御すゝめの通りコサックをよみはじめました。まだなれぬ勢か、中々うまく進みませぬ。昨日中、やつと三十頁ばかり行きました。然し、どうやらかうやら、わからぬ事ハない様です。若い青年が、モスカウをはなれて過去を追想し、未来のゆめを胸中にゑがき乍ら目も覚めるやうな美ハしい雪景色の中を、駅場々々を重ねて辿りゆく処、よくわからない乍らも、面白くよんで居ます。

南国の夏ハ僕等にとりてハ実に愉快です。

紺碧の海、澄み渡る空、あたりを彩る濃き緑の色。

一木一草の微にも、すべて生気の躍って居るのを見ます。

然し、その一体に緊縮した色彩の中にも何処やらに、一種の温やかな慰の調も聞かれないでハありませぬ。

海は毎日訪れる僕の友です。朝に晩に僕ハ弟と二人でこのなつかしい友のもとに行きてハ、共に讃美の声をあはせ、共に寮歌の練習をやります。その美はしい姿についてハ何も申しあげますまい。

いつか兄が、土佐の片田舎を訪はれる事があれバそのとき、あらためて御紹介いたしませう。今朝、父の丹誠の朝顔が、二十鉢ばかり咲きました。草花を愛すると云はれた兄に、御覧に入れたく思ひます。

一輪をつんで兄の机上に御送り申上げます。僕ハこの花を机辺にならべて、これから例のコサックをよまんとしてゐる処です。

お便りまで　　早々　　廿六日朝　　太郎

長崎太郎は四日後の六月三十日にも、井川恭に宛てて長い便りを書いている。これも井川が『向陵記』に書き写した。手紙を投函した日は日曜日で、太郎は弟次郎と教会に行き、帰ってきて認めたと長崎は冒頭に書いている。この手紙でも長崎は郷土自慢をし、井川の土佐への関心を高めることとなる。井川恭が土佐旅行をするのは、二年後の一九一四（大正三）年六月下旬のことである。井川・長崎共々京都帝国大学在学中のことである。

一高時代の長崎太郎は、常に井川恭の影響下にあった。一九一二（大正元）年十月十九日の「長崎日記」には、「寝床にはいつて井川君と話す。／どこまでもどこまでもおしつめんとする友の理性の力。頭脳の明晰を欠く自分は、適当な答をするに苦しんだ。同君の云はれる事がよく解せられない様な点も少なくはなかつた。／十字架のあがない。相対と絶対との間だの橋。基督を信ぜざる正しきものは亡び行くか。／亦同君の怖ろしい程人を見ぬく力と批評的な頭とには、敬服せずには居られなかつた」とある。

また翌日二十日の「長崎日記」には、「井川君と忍蓮（ママ）の池［不忍池］のほとりを歩く。自由意志、人格的の神、完全なる神といつた様な事に関して種々の疑問を発せられた。自分は非常にまどつた。其んな深い問題に関しては、恥かしい事には深く考へた事もなかつたから。／自分は今まで漠然と抱いて居た或種の感念（ママ）を全く破壊して新なる道を進まねばならなくなつた。暮れかゝる忍蓮の池は美はしい光につゝまれて居た。／本郷教会で説教を聞く。／自分は海老名先生の説教により、開かれた処があつたと話すと、それは近代思想に触れて来た証拠だと井川君は云つた。／井川君の真面目なる態度に対して、自分は自分の信仰を恥ると同時に君に対して非常なる尊敬の念をいだかずには居られなくなつて来る。井川君はどこまで小さい自分を導いてくれる事だらう」との感想が記されている。

一高の三年時に長崎太郎は、本郷区弥生町のさる下宿に、井川恭と共に住むという体験をしている。恒藤恭の『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九・八・一〇）の「三十九　一高生活の終りのころ」に、次のような一節がある。

> 自治寮の慣例で三年生に対しては全寮主義をあまり励行しなかつたので、三年生になると芥川は再び自宅から通学することとなり、私も退寮して弥生町の下宿から通学することとした。翌年の四月には、ドイツ大使館づき牧師エミール・シュレーダー氏が小石川区上富坂に新しく設立した日独学館に居をうつし、第三学期　―高等学校時代の最後の学期はそこから通学した。

右の「弥生町の下宿」が、長崎太郎と一緒に住んだ家である。「長崎日記」の一九一二（大正元）年十一月二十三日の記録に、「十九日に弥生町の此処に転る事になつた。井川君と二人が二階の六畳の間を占領する。学校の時計台は真正面に寮は右手の方に屹立して居るのが見える。静な場所だ」とある。井川はキリスト教に強い関心を寄せており、二人は共に聖書を読み、祈っている。井川は中学時代にオリバー・ナイトの聖書研究会に出席していたこともあって、聖書の理解は深かった。唯、彼は常に信仰には懐疑の念を懐いていたのである。この年の夏、土佐に帰省中の長崎太郎に、井川恭は次のような便りを出していた。

長崎君、まどかなる君の信仰をうらやむ。僕はつねに、何かをGREIFENしやうとして、くるしんでゐる。僕の心ハ永き悦楽をとらへてゐる事が出来ない。よろこびたのしみが風にふかるゝまぼろしのごとく、心をおとづれてハ、またみる間に風にふかれて去る。あとにハ、空虚な追憶が、はてもなくつゞく。

（後略、一九一二・七・五付）

井川は長崎の信仰上の恩師百島操を、長崎と共に大阪へ訪ねたことさえある。そのことは『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』の一九一二年九月五日の記事に見られる。この年夏、二人は奈良の各所をいっしょにめぐっている。また、翌年二月四日の『向陵記』には、「夕めしのあと、長崎君と散歩に出て、ポーの詩集をかつてきた。そしてレーブンをよんだ。夜、ヴンド（ママ）のグルントリス デア プシヒョロギイのつゞきをよむ。長崎君は友人の新居君と出ていつたので、長崎君が青年会から借りてきたトルストイ伝を読んだ。非常におも白かつた。トルストイの破門された日に、モスコーの町の学生や労働者たちの行列にかこまれたあたりの記事にいたつて涙がこぼれた。そして、その死んだとき、ヤスヤナ ポリヤナの人々が、「君の記憶、われらの間に消えざる可し」といふ銘旗をかゝげていつたところを読んで、又涙がわいた」とある。

一高最後の学期を長崎太郎と井川恭は、日独学館に過ごす。長崎太郎は弟次郎と、井川恭は藤岡蔵六と一つ部屋に送る。日独学館は一高のドイツ語の教師で、当時三田の統一協会牧師でもあった三並良が、ドイツ人協会の牧師エミール・シュレーデルとの共同経営で、小石川上富坂に建てたものである。高校や専門学校の生徒、それに大学生を収容する一種の学寮であった。三並は温厚な人格者であり、自由キリスト教の立場に立ち、包容力のある考えの持ち主であった。藤岡蔵六は、「私が一高在学中諸先生の中で最も強い感化を受けたのは、新渡戸校長と三並先生とであった」と『父と子』に書いている。

日独学館は何らの制限もない、まったく自由な寄宿舎であった。毎朝シュレーデルが隣の自宅から学館に来て、オルガンを弾きながら讃美歌をうたい、説教をしたらしい。いわゆる早天礼拝である。しかし、それも出席は自由であった。藤岡は朝、歌をうたうとよい気持ちになることもあって、大抵出席したという。シュレーデルは東郷坂にあったドイツ人教会へ通っていた。長崎太郎や井川恭、そして彼らと親しい芥川龍之介もまた、このドイツ人教会である東郷坂教会に出席したとは、すでに記した。長崎が井川恭と小石川の植物園へ写生に行くのは、『向陵記』によると、一九一三年六月十六日のことである。

一高時代の長崎太郎は、井川恭の強い影響下にあった。この四つ年上の友は、長崎太郎のよき友人であるとともに、彼を導く精神的先輩でもあった。太郎は「歩」と題した一九一三（大正二）年前半の日記の巻頭に、「愚な自分の為めに新しい道を示し且常に自分を導いて下される友井川君に此の日記を捧げて置く事にしよう。大正二年正月三日」と書き付けている。